単元の指導計画

単元名　㊀ **相手のことを考える**
読み手のことを考えて、「伝わる文章」を書いてみよう

教材名　「水の東西」「言語は色眼鏡である」
「学びを広げる　日本のお祭りはどういうものですか？」
「身近な日本文化を紹介しよう　生徒作品　折り紙」

1　単元の目標

〔知識及び技能〕(1)ウ・エ・オ・カ、(2)ア・エ　〔思考力、判断力、表現力等〕Bア・イ・ウ・エ
「学びに向かう力、人間性等」

2　本単元における言語活動

読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり、書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。（Bイ）

3　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
❶常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。((1)ウ) ❷実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、語感を磨き語彙を豊かにしている。((1)エ) ❸文、文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解している。((1)オ) ❹比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使っている。((1)カ) ❺主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。((2)ア) ❻情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使っている。((2)エ)	❶「書くこと」において、目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。（Bア） ❷「書くこと」において、読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫している。（Bイ） ❸「書くこと」において、自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文体、語句などの表現の仕方を工夫している。（Bウ） ❹「書くこと」において、目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。（Bエ）	進んで文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解し、自分の考えが的確に伝わるよう、粘り強く根拠の示し方や説明の仕方を考え、課題にそって表現の仕方を工夫して紹介文を書こうとしている。

4　指導と評価の計画（全８単位時間想定）

次	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1	●単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ●「水の東西」を読み、筆者は「鹿おどし」と「噴水」とを、どのようなものとして捉えているか、本文中の対句的表現を手がかりに整理する。 ●筆者が「『鹿おどし』は、……いえるかもしれない。」という理由を、本文の内容にそってまとめる。 ●この文章の構成や展開の特徴を指摘し、その効果について話し合う。	知識・技能 ❶❷ 知識・技能 ❸❹❺ 思考・判断・表現 ❶❷	記述の点検 記述の確認 記述の確認
2	●「言語は色眼鏡である」を読み、「世界は……ものである」とはどういうことか、わかりやすく説明する。 ●英語の単数・複数の区別について、筆者が取りあげている具体例を整理する。 ●「外国語を学ぶ目的」を筆者はどのように述べているか、まとめる。 ●本文の「牛肉」の例のように、日本語と他の言語とで、区分の仕方が違う例を探し、発表する。	知識・技能 ❶❷ 知識・技能 ❸❹❺ 思考・判断・表現 ❶❷	記述の点検 記述の確認 記述の確認
3	●「日本のお祭りはどういうものですか？」を読んで気づいたこと、考えたことを発表し合う。 ●「日本のお祭りはどういうものですか？」で指摘された点に留意して、問題例文を書き直す。	思考・判断・表現 ❸	行動の観察
4	●生徒作品例「折り紙」の構成や表現の仕方、話題や内容について気づいたことを発表する。 ●生徒作品例「折り紙」を参考に、各自で紹介文の読み手を想定した上で、六〇〇字程度で身近な日本文化についての紹介文を書く。 ●単元の目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。	知識・技能 ❸ 知識・技能 ❻ 思考・判断・表現 ❶ 思考・判断・表現 ❹ 主体的に学習に取り組む態度	行動の観察 行動の観察 行動の観察 記述の確認 記述の点検

教科書
p.32〜p.37

水の東西

山崎正和

1 教材採録の意図

今日グローバル化が進展するとともに、文化や芸術の交流や融合も盛んに指摘されている。特に技術革新の先端では、もはや「東西」の文化の独自性は問題ではなく、共通の価値観や技術力によって「物・文化」が作りだされているように見える。明治の開国以来すっかり近代（西洋）化をとげた現代の日本社会の生活をみても、とりたてて「洋の東西」を問う機会はほとんどないといってもよいだろう。

しかし、それは文化や芸術の表層に過ぎない。おそらく文化創造の現場では、自身の作り出す作品の背景にぬぐいがたく伝統文化が刻印されている。また私たちが日常的に感じている季節感や美意識、さらには時間感覚や空間感覚などの感性の根源的なところでも、〈伝統的〉特質は継承されているのである。もちろん同質的文化環境の中にいては、その特徴に自覚的になることはない。だがひとたび異文化環境の中に身をおいてみるとき、それは明らかになる。すなわち比較文化の方法によって、それぞれの文化の独自性は摘出することができる。もちろんそれ自体は恣意的な比較論であって、現実には取り上げる対象や比較の観点によって必ずしも科学的な実証性にかなうものであるかどうかは俄かに判別できないものもある。しかし、そうした比較によって日頃より直観しているわれわれの文化の独自性の理解に、ひとつの道筋をつけることはできる。

殊にあるひとつの対象に対する両者の〈表現〉における特徴的相違に注目するとき、相互の特異性がより鮮明に認識されるようになる。評論「水の東西」で筆者は、〈水〉という私たちの生活にも文化にもきわめて身近で且つ根源的な事象を捉えて、「洋の東西」の文明、あるいは文化の相違を論じている。日本文化から取り上げるのは「鹿おどし」である。その仕掛けによって「流れてやまないもの（水の流れ、時の流れ）」の存在を強調するのだと筆者は述べる。一方、それに対するに西洋の町の広場や庭園にみられる「噴水」をあげる。筆者はそこに空間に静止する壮大な水の造形を認める。文中に対句的に記述される「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と空間的な水」「見えない水と、目に見える水」は、その要約的な表現である。

「水」をつかった芸術表現の対比を通して、筆者は日本人の特質について論じる。それは「積極的に、形なきもの」を恐れない思想以前の「感性」にあるという。断続する音の響きを聞いて、その間隙に流れるもの（時間、水）を心で味わうという「鹿おどし」に、日本人の「水」を鑑賞する行為の究極を筆者は見いだしている。最終的には「東西文化」の対比から見えてくる、筆者による日本文化論であることに留意して読解していきたい。

また、この作品は評論読解の基本である二項対立（比較）の論理構成をもっている。その意味で評論読解の基礎的演習に適した評論作品である。その際に、筆者が「素材」としているのは、「水」の表象であるが、そこに例示されている事象から筆者の意図や観点、思いをも読み取ることができる。なお且つ、それらを授業のノートにきちんと整理させる（作業させる）ことで評論読解の入門教材になるだろう。

評論読解の最初の教材でもあるので評論読解の基本について触れながら、作品「水の東西」の指導ポイントについて述べて行きたい。

第一に筆者の主張（見解）を捉えることである。そのために筆者が何を問題にしているかを理解しなければならない。「水の東西」では、「水」をめぐる文化の対比を通して日本人の「感性」や日本文化の特質を明らかにするところにある。そのためには筆者が対比させている「鹿おどし」と「噴水」についての意見に着目することである。二項対立（比較）の論点を把握することで、そこから筆者が導きだそうとしている主題を理解することができる。

第二に論の構造（論理展開、段落）を捉えることである。全体をいくつかの段落にまとめて整理することで、「水の東西」の論理構造がみえてくる。最初に「鹿おどし」についての考察があり、続いてそれに対比させて「噴水」についての考察がある。二つの文化的な対比についての考察を通して筆者が着目するのは「形なきものを恐れない」日本人の心（感性）である。その主張をもとに「鹿おどし」は、「日本人が水を鑑賞する行為の極致」であると結論づけている。そうした全体の構造を分析しておくことは、論旨の読解と要約に欠かせない読みの作業である。

第三に重要語（句）の理解である。「評論文」には筆者が自分の論点や考えを強調したり、要約したりするために鍵となる語（句）が登場する。それらの語（句）は、文脈の中で特別な意味づけで使われているので読解のポイントになる。「水の東西」では、論点を要約するような意味を受けて使われている「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」などの語句がそれにあたる。

以上の読解のプロセスを支えるのが、指示語（指示内容）や接続詞（接続語）の理解である。「水の東西」は接続詞の使用の比較的少ない評論文である。そのかわりに話題の転換をはかる表現として「そういえば……」とか「そういうことをふと考えさせるほど……」などの接続語が使われている。接続詞（接続語）の理解は、文と文（段落と段落）との関係（順接、逆接など）を明らかにして話題の転換を示唆する。それは、筆者の述べようとする論理展開の方向性（段落相互の関係）を決定するものなので特に注意を要する。

同じように指示語の示す内容の理解も欠かすことができない。一般的に指示語は既述内容を受け止めながら、次の論点への展開を示唆していく役割をもつ。そのため論理的文章の読解には必須の前提である。「水の東西」でも随所に指示語は使われている。例えば「それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れてやまないものの存在を強調している」（32・10）では、「『それ』とは何を指すか。」という脚問が設定されている。指示内容の理解については、読解のポイントで立ち止まり、その都度確認させていくことを心がけていきたい。

最後に、本教材は「評論」教材として扱っているが、多分に筆者の直観や思いが表れている個性的作品でもある。その点に留意して表現の特徴を理解すること、また類型的な比較文化の固定観念に陥らないよう、配慮して学習させることにも留意したい。

二 相手のことを考える

2 作品の概説

❶ 著者

山崎正和（やまざきまさかず）

劇作家・評論家。一九三四（昭和九）年～二〇二〇（令和二）年。京都市の生まれ。父は物理学者、山崎正武。母花子。五歳の時、旧満州医大予科教授に就任した父に従って奉天（現・瀋陽）に渡り、一九四八（昭和二三）年に京都に引き揚げるまで、旧満州（中国東北部）で幼年時代を過ごす。父から厳しい教育を受け、小学生の時は、教科書以外を読むことは許されなかったが、旧制中学一年の頃、病臥した父を看病しつつシェークスピアや森鷗外を読み、文学に目覚める。帰国して一九五二（昭和二七）年、京都大学文学部哲学科に入学し、さらに大学院で美学美術史を専攻する。大学在学中から演劇活動を行い、一九六二（昭和三七）年、「カルタの城」を発表する。一九六三（昭和三八）年、「世阿弥」が俳優座によって上演され注目される。この作品で、岸田国士戯曲賞を受賞し、劇作家としての地位を確立する。以後、「後白河法皇」「野望と夏草」「実朝出帆」など次々に発表し、現代を代表する劇作家として評価される。

一方、文芸批評・文明批評・芸術論・史論などの分野において深い学識からの鋭い評論を発表し、評論家としても第一線に立っている。一九六六（昭和四一）年には『劇的なる精神』を刊行する。一九七一（昭和四六）年に『劇的なる日本人』を刊行し、日本人の劇的精神を指摘した。この作品で芸術選奨を、一九七二（昭和四七）年に『鷗外　闘う家長』で、一九八四（昭和五九）年に『オイディプス昇天』で読売文学賞を受賞した。その他に『不機嫌の時代』『柔らかい個人主義の誕生』などがある。

❷ 出典

『山崎正和著作集5　海の桃山記』（一九八一年、中央公論社）所収の「水の東西」による。漢字・仮名の入れ替え、現代仮遣いへの変更以外に本文との異同はない。

❸ 表現上の特色

日常的に身近な「水」を使った「鹿おどし」と「噴水」を対比させながら、西洋文化と日本文化の一端を簡潔に論じた評論である。ふたつの対照的な仕掛け（「鹿おどし」「噴水」）に着目して両文化を明快に分析する視点が説得力をもっている。特に両者の分析に際しては、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」という鍵になる語句の対比が、この評論の理解を助けていることにも着目しておきたい。これらの語句がそれ自体で筆者の論じている内容の要約の役割をも担っており、全体として鮮やかな二項対立の構成がこの評論の特色を形成している。すなわち「水」をめぐる文化的な二項対立の意識は、単に論じられている素材（「鹿おどし」対「噴水」）のみに限られることなく、使われている語句の対比としても一貫性をもっているのだ。そのために大変読みやすく（板書等）整理しやすい評論になっている。

もちろんこの評論における筆者の眼目は、単純な「水」の東西文化の比較に終始するものではない。それぞれの文化（「鹿おどし」「噴水」）を作り上げてきた背景について論究して、そこに単なる気候や技術などの「外面的な事情」を超えた「独自の好み」ともいえる「思想以前の感性」の特性を明らかにすることにある。とりわけ「積極的に、形なきものを恐れない」日本人の心の特性に迫ることが目的である。しかし、そうした結論が説得力をもつのも、実は前半の二項対立による考察が筆者の論点を鮮明にしているという意味で有効に効いているといえるだろう。

3 参考文献

❶ 指導者のための参考文献

- 山崎正和『混沌からの表現』（二〇〇七年、ちくま学芸文庫）
- 加藤周一『日本人とは何か』（一九七六年、講談社学術文庫）
- 加藤周一・M・ライシュ・R・J・リフトン、矢島翠訳『日本人の死生観 上・下』（一九七七年、岩波新書）
- 唐木順三『中世の文学』（一九六五年、筑摩叢書）
- 唐木順三『無常』（一九九八年、ちくま学芸文庫）
- 河合雅雄『子どもと自然』（一九九〇年、岩波新書）
- 小林秀雄『モオツァルト・無常という事』（一九九一年、新潮文庫）
- 司馬遼太郎『街道をゆく26　嵯峨散歩、仙台・石巻』（一九九〇年、朝日文庫）
- 夏目漱石「現代日本の開化」（『私の個人主義』一九七八年、講談社学術文庫）
- 丸山真男『日本の思想』（一九六一年、岩波新書）

❷ 学習者のためのブックガイド

- 和辻哲郎『風土』（一九七九年、岩波文庫）
- 山崎正和・丸谷才一『日本史を読む』（二〇〇一年、中公文庫）
- 進士五十八『日本の庭園　造景の技術とこころ』（二〇〇五年、中公新書）

4 学習指導の展開と評価

❶ 評価規準

知識・技能❶ 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。(1)ウ

知識・技能❷ 実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。(1)エ

知識・技能❸ 文、文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解している。(1)オ

知識・技能❹ 比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使っている。(1)カ

知識・技能❺ 主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。(2)ア

思考・判断・表現❶ 「書くこと」において、目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。(Bア)

思考・判断・表現❷ 「書くこと」において、読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫している。(Bイ)

❷ 学習指導の展開例　[3時間を想定]

	時間	学習活動	指導上の留意点
第1時限	導入	1 日本的なもの、西洋的なものと対比されるものをあげる。 2 「鹿おどし」「噴水」について確認する。 3 全文を音読・黙読する。	●自由な思いつきを発表させる。 ●見たことがある生徒がいれば、いつ、どこでなどを発表してもらい、共通の話題にする。 ●漢字、語句の意味にも留意させる。小テストを行ってもよい。 漢字 語句
	展開1	4 〈初め～33・9〉を読解する。 5 「流れる水と、噴き上げる水」の具体的な内容を読み取る。	●「鹿おどし」のしくみを理解させる。 ●〈初め～33・9〉の内容を対比的に板書する。
第2時限	展開2	1 〈33・10～35・4〉を音読・黙読する。 2 〈33・10～35・4〉を読解する。 3 「時間的な水と、空間的な水」の具体的な内容を読み取る。 4 〈35・5～36・5〉を音読・黙読する。 5 〈35・5～36・5〉を読解する。 6 「見えない水と、目に見える水」の具体的な内容を読み取る。	●漢字、語句の意味にも留意させる。 ●時間的存在と空間的存在との違いを考えさせる。 ●漢字、語句の意味にも留意させる。 ●「見えない水」について考えさせる。日本文化の特質について筆者の考えを理解させる。
第3時限	まとめ	1 対句的表現を手がかりに、筆者が「鹿おどし」と「噴水」をどのように捉えているか整理する。 課題A❶ 2 〈36・6～終わり〉を音読・黙読する。 3 〈36・6～終わり〉を読解する。 4 最後の一文に集約される筆者の主張の理由を、本文の内容にそってまとめる。 課題A❷ 5 文章の構成や展開の特徴を指摘し、その効果について話し合う。 課題B	●箇条書きから始めさせる。 ●漢字、語句の意味にも留意させる。 ●「言うまでもなく……なかっただろうか」(35・16～36・4)の段落と、最終段落の記述を手がかりに考え、「流れる水」「時間的な水」「見えない水」といった「鹿おどし」の特性を押さえてまとめさせる。 ●本文の具体的な記述(根拠の指摘)に基づいて話し合いを展開するよう留意させる。

	評価
第1時限	知識・技能 (1)ウ・エ 評価の実際▶本文中の漢字や語句の意味を正確に捉えるとともに、対義語について調べ、語彙を豊かにしている。[記述の点検]
第2時限	1 〈33・10～35・4〉を音読・黙読する。 2 〈33・10～35・4〉を読解する。 3 「時間的な水と、空間的な水」の具体的な内容を読み取る。 4 〈35・5～36・5〉を音読・黙読する。 5 〈35・5～36・5〉を読解する。 6 「見えない水と、目に見える水」の具体的な内容を読み取る。 次時と合わせて行う。
第3時限	1 対句的表現を手がかりに、筆者が「鹿おどし」と「噴水」をどのように捉えているか整理する。 2 〈36・6～終わり〉を音読・黙読する。 3 〈36・6～終わり〉を読解する。 4 最後の一文に集約される筆者の主張の理由を、本文の内容にそってまとめる。 5 文章の構成や展開の特徴を指摘し、その効果について話し合う。 知識・技能 (1)オ・カ、(2)ア 評価の実際▶主張と論拠の関係を捉えて文章の効果的な構成について理解するとともに、例示や言い換えなどの効果について理解している。[記述の確認] 思考・判断・表現 Bア・イ 評価の実際▶比較して論じるという文章構成の方法について理解し、文化について自分の考えをもっている。[記述の確認]

5 教材の解説

❶ 要旨

[200字] 日本の「鹿おどし」は、水や時の流れといった流れてやまないものの存在を強調する仕掛けである。一方、「噴水」にみられるように、「西洋」では水は空間的な目に見えるものとして捉えられ、造形の対象になってきた。日本人は「行雲流水」という言葉にみられる、一切を自然に任せるという思想をもっているが、その思想は、形がなく自然に流れてゆくものを好ましく感じるという日本人独特の感性に裏づけられているものである。（197字）

[100字] 「西洋」では、水は空間的に捉えられ、造形の対象になってきた。一方日本では、水は形がなく流れてやまないものとして捉えられる。これは自然に流れゆく形なきものを好ましく感じる日本人の感性の現れである。（97字）

[解説] 水を素材として東西の文化の相違を述べた文章ではあるが、筆者はその相違を述べることによって、筆者の考える日本の文化、日本人に独特の感性を述べているのだという点をはずさないように指導したい。

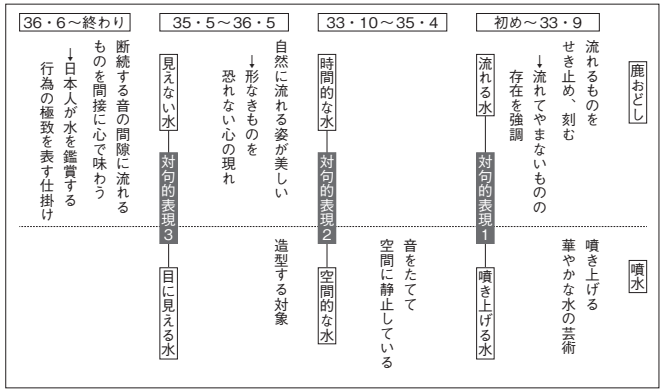
❷ 全体の構成

初め～33・9「流れる水と、噴き上げる水。」	**流れを感じさせる水** 鹿おどしは流れるものをせき止め、刻むことによって、かえって流れてやまないものの存在を感じさせる。この感じは人生のけだるさに通じる。ニューヨークの人々は、この鹿おどしの音と音との長い間隔を聴くゆとりがなく、むしろ水の芸術というべき噴水にくつろぎを感じている。
33・10「そういえば…」～35・4「時間的な水と、空間的な水。」	**空間に静止する水** 欧米にはいたるところに噴水があって、その壮大な造形は彫刻のように空間に静止しているように見えた。
35・5「そういうことを…」～36・5「見えない水と、目に見える水。」	**日本人の感性** 日本の伝統には噴水というものは少ない。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造形する対象ではなかったのであろう。「行雲流水」という思想は、水のように形なきものを恐れない日本人の心の現れだといえる。
36・6「もし、…」～終わり「…といえるかもしれない。」	**「鹿おどし」が表すもの** 「鹿おどし」は、水自体を見ずに、その流れを感じる、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえる。

[参考]「…水と、…水。」という対句的表現に注目して四つに分けたが、次のような分け方も考えられる。

- 初め～33・1「…強調しているといえる。」
- 33・2「私はこの『鹿おどし』を、…」～35・3「…静止しているように見えた。」
- 35・4「時間的な水と、…」～35・15「…なかったのであろう。」
- 35・16「言うまでもなく、…」～終わり「…といえるかもしれない。」

❸ 展開図



❹ 語句・文脈の解説

32ページ

1 **鹿おどし**　［庭園装置の一つ。本来は、その音で田畑を荒らす鹿や猪などを追い払うための仕掛け。「添水・しかおどし」ともいう。］「鹿威し・鹿脅し」と書く。教科書33ページの写真のように主として竹筒を用い、中ほどに支点を設けて全体を支える。片側には切り口を設け、筧などから水を引いてためる。ある程度水がたまるとその重みで竹筒がシーソーのように傾いて水を吐き出す。水を吐き終わると勢いよく元に戻るのだが、その反対側の端が、その下にある石を打ち、音を出す。現在見られるのは日本庭園などでの趣味的な装置である。

問 「鹿おどし」と「噴水」のように、日本的なものと西洋的なものとで対比されるものを、思いつくままにあげなさい。

答 米飯とパン、箸とフォーク・スプーンなど。

問 第一形式段落の第二文～第四文は、第一文に対してどういう役割を果たしているか。

答 第一文「『鹿おどし』が動いている」の具体的描写。

1 **愛嬌**　好ましさを感じさせたり、笑いを誘うような言動や表情。ここでは、鹿おどしの動きにそれを感じるということ。「愛敬」とも書く。

問 「愛嬌」に相応する描写を第一形式段落から抜き出しなさい。

答 ●「かわいらしい竹のシーソー」（32・2）
●「こおんと、くぐもった優しい音」（32・5）

＊愛嬌　①表情や言動が愛らしく、人好きのすること。②好ましさを感じさせたり、笑いを誘うような言動や表情。愛想。③商店で客の気を引くために行う、値引き・おまけ・催し物など。

1 **けだるさ**　体の状態や気分がなんとなくだるいこと。「け」は接頭語で、動詞・形容詞に冠して、なぜそういう気持ちになるのかわからないが、その感じを払いのけることができない状態であることを表す。

問 筆者は「鹿おどし」のどのようなところに「なんとなく人生のけだるさのようなものを感じる」のか。本文中から抜き出しなさい。

答 ●「単純な、穏やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される」（32・6）
●「何事も起こらない徒労がまた一から始められる」（32・7）

2 **竹のシーソー**　「鹿おどし」（32・1）の項参照。

3 **水受け**　「鹿おどし」（32・1）の項参照。

3 **筧**　［水を引いてくるために竹や木で作った樋。］「掛樋」とも書き、「かけひ」とも発音する。竹の節を抜いたり、木の芯をくり抜いたりした樋を、地上に設けて水を引く装置。ここでは、この水を鹿おどしの水受けである切り口に引く。

問 「緊張が高まり、それが一気にほどけ」（32・6）とは何のどのような状態をいっているのか。

答 「鹿おどし」の水受けに水がしだいにたまってゆき、いっぱいになって、シーソーが傾いて水をこぼす状態。

5 **くぐもった**　声や音が物の陰から出るように、こもって聞こえるさま。

6 **単純な、穏やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される**　竹が石を打つときに生じる音には何の人工的な工夫もなく、それは鹿おどしに水が流れ続ける限り、常に一定の間隔でいつまでも続くということ。

7 **何事も起こらない徒労**　仕掛け自体は人工的でも、鹿おどしの動き自体は自然なものだから、緊張が高まる中で何事かが起こるかもしれないと期待するのだが、その期待ははずれる。そのような期待をはずした動きを徒労とみなすのは、その動きを見ている人間の感じ方（＝感性）の問題である。「人生のけだるさ」（32・1）に通じる表現である。

＊徒労　骨折って働いても役に立たないこと。無益な労苦。

8 **静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てる**　竹が石を打つ音が一定のリズムを作り、「時を刻」む。その音と音との間に静寂と時間の長さが作り出されるということ。「いやがうえにも」は、「すでにそうである上にますます」ということだから、見ていても静寂と時間の長さを感じる上に、音を聞くとますます、という意味になる。

10 **それ**　「流れるもの」を指す。

問 「それ」とは何を指すか。

答 「流れるもの」（32・9）
▼「水の流れなのか、時の流れなのか、『鹿おどし』は我々に流れるものを感じさせる」（32・9）とある。

10 **かえって**　流れるものをせき止め、刻むのであれば、「流れるもの」の存在は否定されるように思われるが、そうすることが逆に「流れてやまないものの存在を強調」するので、この副詞が用いられている。

問 「かえって」とは、どのような働きをする副詞か。

答 物事の展開が予期に反することを表す。

33ページ

2 **ニューヨーク**　アメリカ合衆国東部のニューヨーク州の州都で同国の経済・文化の中心都市。

3 **素朴**　飾り気がなく、自然のままのようすをもっていること。

問 「素朴な竹の響き」（33・3）と対照的な語句を抜き出しなさい。

答 「華やかな噴水」（33・6）

4 **ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて**　鹿おどしの音と音の間隔に存在する静寂と時間の長さを、ニューヨークの銀行に居合わせた人々が受け止めない理由を筆者は「忙しすぎて」と述べている。窓の下に噴き上げる「華やかな噴水」に気持ちをくつろがせていたとある。

ここではニューヨークの人々が、「鹿おどし」自体を楽しむ文化のないことにも理解をとどかせておいてよい。

6 **ここでは**　ニューヨークでは。「噴水」と「鹿おどし」の対比が示唆される。

問 第三形式段落は、それ以前の文章の内容とどのような関係があるか。

答 それ以前は「鹿おどし」の日本人の受け止め方を述べていたのに対して、第三段落では西洋人の受け止め方を述べている。

問 第三形式段落の文末表現の特徴を指摘し

❻「課題」の解説

課題A

1 筆者は、「鹿おどし」と「噴水」とを、どのようなものとして捉えているか。本文中から対句的表現を三つ探し、それを手がかりに整理してみよう。

解答例

- 「鹿おどし」は、日本人に、自然に流れる水そのものを感じさせると同時に時間をも感じさせ、形のないものを間接的に味わわせる装置として捉えている。
- 「噴水」は、水を人工的に空間に噴き上げさせることによって、西洋人に直接目に見える形で水を味わわせる装置として捉えている。

解説

- 流れる水…「鹿おどし」を流れる水であり、水そのものを加工することなく、水の自然の流れに従って流れる水である。
- 噴き上げる水…「噴水」の水であり、水の自然な流れに逆らって人間が人工的に空中に噴き上げさせた水である。
- 時間的な水…「鹿おどし」を流れる水であり、それが刻む単純な、穏やかなリズムによって、日本人に間接的に時間を感じさせる水である。
- 空間的な水…「噴水」の水であり、西洋人が、自然な水の姿を圧縮し、ねじ曲げ、粘土のように造型して、人工的に空間に噴き上げた水である。
- 見えない水…「鹿おどし」を流れる水であり、形として目に見えない存在であって、日本人に好まれる水である。
- 目に見える水…「噴水」の水であり、形として目に見えるように造型された水である。

2 『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない」（36・8）という理由を、本文の内容にそってまとめてみよう。

解答例

「鹿おどし」の立てる音と音との間隙に、日本人は水や時間の流れを感じ取る。つまり「鹿おどし」は、水を形のないものとしてとらえ、形のない自然な水の流れを美しいとして好む日本人の感性にぴったりと合った装置であるといえるから。

解説

直接には、教科書35ページ16行目「言うまでもなく……」の段落、36ページの6行目「もし、……」の段落の記述を手がかりに考える。さらに、「噴水」と比較することによって、筆者が明らかにしてきた「鹿おどし」を流れる水の「流れる水」「時間的な水」「見えない水」といった特性を押さえて考えればよい。

課題B

1 この文章の構成や展開の特徴について指摘し、その効果について話し合ってみよう。

解答例

- 「水」を素材とする「鹿おどし」（日本）と「噴水」（西洋）との二項比較によって、それぞれの文化的特徴が対照的に論じられる。
  ↓具体的な素材に基づいているので、理解しやすい。
  ↓「水」という素材を使って、「日本」と「西洋」の文化について対比的に論じられるので、理解しやすい。
- 「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」という対句的な表現で論旨をまとめている。
  ↓論述と結びついて対比してまとめられているので、理解しやすい。
  ↓対句的な表現が、「水」をめぐっての対比の表現になっているので理解しやすい。
- 「鹿おどし」「噴水」という具体的な対象を素材としているが、その論述には筆者の主観的な判断が下されている。最終的には「形なきものを恐れない」「日本人」の心（や文化的特徴）についての、筆者の考えが展開される。
  ↓対比を通して、「日本人」の心の現れが述べられるので理解しやすい。
  ↓「日本人」「西洋人」についての論述が、筆者の意見や考えに基づく対比なので偏りが生まれる。
  ↓「文化」についてのステレオタイプ（固定観念、思い込み、偏見）を形成してしまう危険がある。

解説

「話し合い」活動である。具体的な記述（根拠の指摘）に基づいて展開することが求められる。その他留意すべきことを以下に述べる。

- 「構成・展開」について具体的な指摘がなされているか。
- 「構成・展開」の特徴の指摘が、「その効果」に結びついて説明されているか。
- 質疑応答は適切に行われているか。
- 振り返り・自己評価時間が設けられているか。

❼「語句」の解説

次の語の対義語を調べてみよう。

緊張　無限　静止　単純

解答例

- 緊張↔弛緩
- 無限↔有限
- 静止↔運動
- 単純↔複雑

解説

対義語とは、反対の意味をもつ語であるが、語の多義性により、次のような複雑な対応関係が生じることもある。

- 行く↔来る
- 行く↔帰る
- 行く↔戻る
- 進む↔戻る
- 進む↔止まる
- 動く↔止まる

このように、対義関係は常に一義的に決まるものではない。例えば、解答の語種に定めはないため、「緊張」を「気分が張りつめて、ゆるみのないこと。」の意とすれば、「リラックス」なども正答となりうる。

❽「漢字」の使用箇所

緩やか（32・6）　徒労（32・7）　静寂（32・8）
素朴（33・3）　間隔（33・5）　華やか（33・6）
凝らす（33・14）　大阪（35・8）　乏しい（35・9）
対象（35・14）　鑑賞（36・8）　極致（36・9）

❾読み深めるために

「国語」の教材として学習する「評論文」は、筆者の主観性に重きが置かれた文芸評論的な色彩の強いものから、論説文などの新聞記事、科学評論、報告文など事実や科学的データに基づいて書かれたものまで、その扱う分野は多様である。しかし、いなかる作品であっても、それが言葉によって変換された（書かれた）という意味で、厳密には創作といえるものであり、創作である限り筆者の意図や主観が介入することは排除できない。そうした観点から評論教材は、あるテーマについての筆者の考え・意見を解釈するという営みである。

例えば、文芸評論家小林秀雄のデビュー作となった評論「様々なる意匠」（一九二九年）に「批評とはついに己の夢を懐疑的に語る事ではないのか」という言葉がある。それによれば評論読解とは、その「己の夢」つまり筆者の夢を解釈することにほかならないことになる。もちろん最初に述べたように、「評論教材」には多様な作品が採録されている。文芸評論的色彩の強いものから、事実や客観的データに基づいた評論文や報告文も教材として扱うことは当然ある。しかし、その際にもどこまでが事実やデータであり、それをもとにしての筆者の意見や見解はどうなのか、という記述内容について正確に識別する読解力が求められる。読者（解釈する）側にも、その表現や記述方法に対しての批判的読解力が要求されるのは、「評論文」読解の基本的手続きである。

さて、評論文「水の東西」は、〈水〉をめぐっての表現を通して、日本と西洋の文化比較を行いながら、日本人の特質を論じている。「鹿おどし」や「噴水」など具体的な事象を素材とした〈評論〉の形式をもっているが、論述においては、筆者の主観的判断や思いに貫かれた作品であることに留意したい。

例えば、冒頭「鹿おどし」の動きに「なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある」（32・1）とあるが、この「……感じることがある」という言い方は、それがそもそも筆者の主観的な印象であることが前提となっていることに注目したい。一方、「噴水」についての記述を見ても、「それ（噴水）は揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音をたてて空間に静止しているように見えた」（35・2）とある。「バロック彫刻さながら」「……ように見えた」という比喩表現には、筆者の主観が表出されているといえるだろう。他にもこうした表現は随所にみられるが、これはこの作品が劇作家によって書かれた文芸評論的色彩の強いものであることを物語っている。

そうしてみると、この評論文の中で日本人の特質とされた「積極的に、形なきものを恐れない」感性というのも、あるいは筆者の「夢」ということになるのかもしれない。もちろん、だからといってこの作品の質を下げるものでは全くない。むしろ筆者の思いの込められた「評論文」として精読することを通して、筆者の思いを丁寧に理解するとともに、それに対する読者の側の考えなり意見なりを表明することが評論文読解の重要な営みになってくるだろう。